特54
56

貳拾編大尾

雲霧五人男

第四編

伊東專三編輯
橋塘

歌川國峯画図

雲霧五人男第四編之序詞

今より餘程前あり々ん故人市川市藏が猿若町の芝居ふ〻因果小僧の役を勤め向ふ嶋みてしの場ゐ黙阿彌翁が新作なる可し名所盡しの臺詞もありて最面白しと思ひしっど廿年餘りの昔しまて編者が幼稚の時なまば已ゐ忘れて能も覺えを今此編とつゞるまで及びて思ひ出しゐ昔しの芝居今日の如く名前のみ立派で平手な俳優ゐ少ゐく名人上手ゐ多かりしと言ば友人打笑ひ夫なん芝居の事のみならを和主が畑の編者丹も當頃ゐをゐ何々と世まで有名なゆ上手ありく本より先まで作者を信じ誰々が物出版せしと言ゆ時まゐ中とも見ず競て是状求しが目下ゐ然らを田舍書生や半熟記者がお先真暗本の書樣面組の体裁知さる僻まで矢鱈書名を費よりも德を取れ草稿料さへ召上れば如何でよいとの不實心から只費先れ書肆まで詔ひ氣まで入やうな呼名題外ゐゐ物も内證ざが汗牛充棟ゐ出版もれ見らゆゝゐ最少々きば和主も精々勉強ゐし伊東と言る名前丹て本と賣やう爲てゐ如何と一番側から打ち込れさ其半疊ゐ實まで道理萬々相違仕坐ゐくゆと記入くまづ四編れ幕明そゐ爲口序左樣と白を

伊東橋塘

明治十七年八月二日御届
仝　年九月　廿日出版　定價金四錢

編輯人　東京府平民　伊東專三
出版人　東京日本橋區本石町壹丁目廿六番地　吉塲清藏
發兌元　東京牛込區筑土八幡町貳番地　東京金玉出版社
大賣捌　東京日本橋區室町三丁目九番地　滑稽堂

第四編

月下の白刃婦女を害し
樹間の消息委細を記す

登時熊五郎ゐ六之助まで打向コレ六や和主も雲霧の屬下ゞやアねへの如何いふ解があるゐゐ知ぬが偽盲目とおり按摩とゐ隨分氣の利ぬ今夜の促裝然して和主ゐ何處にゐるのざ。サア貰た金も遣ひ失し久し振ゐく此江戸へ今茲の三月出て來のゐ今ゞやア明神下の屬下の家まで隱く居て出來合しさる偽盲目按摩と成て宵の間まで療治まで遣入く容子伺見置更て仕事をしくゐるが吾儕の事のみゐ言れめへ和主も五本手の汚た浴衣ゐ小倉の帶の綯吳たを締さる計が水下駄を穿さ所ゐ如何しても田舍のゐ來さ飯焚だが然して和主ゐ何處ゐゐるのだ。此飯焚と見える所が此方の山で江戸へ來ると權次ゐ日本橋の木原店で會津屋金兵衛といふ羅吳服屋丹おり今でゐ堅氣ゐ口入でツイ此先の嶋屋の家へ吾儕ゐ飯焚ゐ住込と其所の女房と手代とまで云々斯いふ譯が有り然も今夜の仕事丹て七十兩丹成事ざが何と言ゐゐ大き過く吾儕一人でゐ始末まいのゐ、ねへ誰の相手があきゐしと思つてゐる時呼込ざゐ因果小僧の六之助此奴ゐ出來たと思つたが盲目で有てゐ詮方がねへ夫とも虚妄か真實ゐと歸るを待く裏口のゐ窃

と抜出し来て見れば思ふに違えぬ偽盲目就ては後の仕事もあるゆゑ今夜は和主が先へ廻り首尾よく行てはヨシ呉まいかと話をを聞く此方は黙頭然いふ仕事の有とも知ぬ療治に這入て和主に見られたは言ば此方が物怪の僥倖夫じゃア直と先へ廻つて立上るとき測走は煙草入へ目を着て姿に似合ず大層能煙草入をば持てゐるあア。ムヽ是ら是は今療治をしてゐると主人がすや〳〵寐たるゆゑ其間に一寸盗んで来のざ。相変らず早い男ざと互に打笑右左別れてお宿は行に々れ熊が勘ふお柳惣助更ゆく鐘を暗号となし裏口よりして窃に出本郷を下り湯嶋ある切通しまで来掛れば路の側に客待顔ある竹輿昇二人の立話しノウ與助さん今夜もまだ仕事をしねへがナゼ此様に竹輿屋が閑に成さらう。然ばサ是とふふ直を究て乗て置ては途中でねざり初るうち夫で段々閑になるのサ。成程夫も然だらう何でも營業は正直ふせふやア行ぬのうと正直らしい二人の話しを惣助は序よしと本母寺までの駄賃は問ば二朱と四百と言々るゆゑ夫懐よりしく壹分出しあとは酒代にやる程に氣を附て行てと言々れば竹輿屋は喜びお柳を乗せ擔出すに惣助は是を引添ひ淺草より吾妻橋をば打渡り漸々に掛る向嶋枕橋さへ已に過ぎ長き堤も頓て其短き生命と白髭前左りへ曲りて本母寺の森の此方

へ差掛る此時遠く幽に聞ゆる鐘は淺草寺のえや丑三に有るなる可し川水の音淙々と流れて跡を止めかね晝さへ人足稀なる所ろ況て夜陰は人跡絶たる夏艸に唧き々る虫の音計り囂囂たり登時側の木蔭よりヌツと出さる一人の男白刃抜手も見せずしく竹輿の提燈を斷る思ひ掛おき猿籍に二人の竹輿昇は打驚きキヤツと一聲揚しまゝ竹輿を捨置素来し方へ一散走りに遁行々る是に て驚く惣助は提踏み滑し反甫の方へ轉び落つゝ影さに見えずお柳は竹輿の中に在て氣も魂魄も身に添ず怖きに念佛やしけるが曲者グツと手を延し襟髪掴んでお柳を引出しサア女懐中に在る金殘らず早く出

へ出て終と言まて齒の根も合ぬながら夫ハ和郎のお目違ひ如何〳〵吾儕が金なんぞを。エヽ隱してもモウ行ねへ胴卷へ入て七十兩持く居のを確ゑ知あとを附さゆ此吾儕だ夫とも否だと吐すゆら詮方がねへゝら白刃をお主が腹へお見舞申まと目先へグツと突附ゆ夏猶寒き刃の光り星を指まてお柳ハ發と思ふ物うゝ生命ゆ代る寶ハあき故詮方おく胴卷とく〳〵其所へ出〳〵御仰通り此金ハ殘らず上て終ますまば生命計ハ助くと通與ゑ受取莞爾と笑み然順朴ゑせへ出す事なら何でお主を殺を物うと白刃を納て胴卷を腹へ確乎と占るをり颯と吹來ゆ川風の夜風ゆ冠し手拭ひ取まを初て顯す其面お柳ハ月の光ゆ見やりヤア和主ハ先刻の按摩さんと言まて此方ハ驚きながら拔手も見せず肩先を破羅利寸と切下まば呀と叫びまを倒れながら白刃持手ゆ取附て金さへ取ば生命丈ハ助るといふ言葉ゑ違ひ何で吾儕と殺すのゞやゝム〳〵益ねへ生命を取のも殺生助てやらうと思たが面を知まく按摩さんと言まさ上ハ助て置と後日此身の災害ゆゑ夫でお主と殺すのゞモウ斯あれば何も彼も明して夫を引導代り言のも今更面倒ながらお主が家の飯焚のアノ熊五郎も一つ社會互ゑ包む身の惡事別れ〳〵ゑ姿を代へ離れてゐたが甲夜ゑ計ず會たる節ゆ斯々と話を聞て先へ廻り行方を松の木下蔭月より冴さ刃の手の中到底いけねへ生命と斷念梅若塚の常念佛一つ鉦をば冥途ハ迎ひと思つて成佛〳〵まへと真を明すゑお柳ハ齒齒し世ゆ深切お田舍漢と思つてゐたが熊五郎ハ然る惡人ゆゑ欠落を勸く置て社會を頼み途中で金を取せんと巧れさゝが口惜い爭阿容〳〵殺さる可きアノ惣助ハ何處へ行た惣助へノ〳〵人殺〳〵と叫ぶを立蹴ゑ蹴倒〳〵て何狀吹面ゝえくれだ假令泣ても喚くも人里離れた隅田提答へる物ハ風乃音外にハ何も嵐ゆ會ふ花より先へ散る露ゑ置く玉ゆ緒も今が別れ觀念せよと振上る脫れ刀を下ゑ立つお柳ハ其所等這廻ゑ遁んとするを遁〳〵もせず又一刀あびせたる深傷ゑ溜ゝを倒るゝ所乃を登〳〵掛つて十々目乃一刀刺貫けば魂消る一聲虛空を摑ゑ四肢を悶き眼を見張て息絶さり六之助ハホツト息吐き殺すも惜い美人ざが面を知れゑ詮方がなく提を露と〳〵除さハ偖殺生な事をしたと獨言つつ刃乃血狀拭ふて鞘ゑ納〳〵上嘯ゝ〳〵熊が待ゑねやう渠と誘引然ざ〳〵と提ゑ立る木ハ間隱れ何國ともなく立去々り不題二人乃竹輿昇ハ竹輿を昇捨一所懸命南乃方へ遁去て三圓前まで來り〳〵がやう〳〵ゑ〳〵ゑ心附設〳〵吉兵衛さん然遁ゑも詮方がねへ竹輿さへ彼所ゑ捨てあるゑモウ狼籍者ハ遁た時分取て返さうでハ有まいゝ。成程與助さんがいふ通り夫でハ一度

歸つく見やうと素ろ所へ至り見まば以前ろ女に血ゐ染を殺されゐるに大きゐ驚き腰打抜す計りなりしが斯る所に長居に無益竈も早くと與助にせり立行んとをるを吉兵衛止め夫も然でにある々れど此まゝ竹輿を擔で行た事が後ゐも露顯さらお咎あらんも知ざまば是等ゑ始末を云々と村役人ゐ届け置き夫うら行てに如何であると言ども聞ゑ首を打振ゑ夫に然でも有ふけまど客に殺さま賊に知ゑ其あとゑ成ゑ云々と訴へ出さら疑ひ掛り怪い竹輿昇め本人ゐ出るまで入牢中ー附ると言また時に互ろ身詰りお主おんぞに一人者ゆゑ夫程苦にもなるめへが吾儕おどに知てゐ通り妻子ゐ外ゐ目ゑ惡い母親までゑ有る身体設ー其樣事が有く幾日でも營業を休む事ゐ成てに自分計りう家内中路頭ゑ迷ふ解おれば人ろ知ぬに僥倖なま此儘窃に立去んと勸る言葉ゐ吉兵衛も流石否とゑ言無ゑ打黙頭つゝ諸共ゐ竹輿と擔ぎく歸りさる是ぞ二人が身ろ上に災害をなを初とに後ゐぞ思ひ合さまたり。朝顔に朝な〳〵ゐ咲代て盛久ーき花ゐ色を籬ゑ纏ひ其外ゑ千種を植込む植木屋を本母寺ろ邊ゐ仁右衛門とて妻ろお熊と二人消光水入ぎなる田舍世帶今日も朝疾起出て主個に庭ろ手入をおー女房を勝手ゐ用を終了互ゑ暫く休らふ中主個を煙草を呑おがら庭を眺く妻ゑ向ひ毎年作る朝顔も昨年を瑠璃が能く咲たれば今茲を絞と精一むい骨を折さでやう〳〵と美事咲分ゑ作り出たが未ざ緑日へを出さおいうら本郷ろ旦那樣ゑ一鉢お目ゑ掛たいと思つくゐまど閑がなく夫も其まま過てゐるが自分計りで見てゐるを惜い物だと言尾ゑ着き妻のお熊が言ゆ樣彼處ゐ家ろ内室を吾儕が乳をお上ーたお柳樣ゆゑ御不沙汰をーおい樣にと心掛ゐる事なれば翌日ゐもアノ朝顔を持て行き差上て參りませう。然ーて呉まば何より能が夫ゐ附てアノお柳樣を主管れ惣助どんと解でも有かと思えまるが。然ばサア其事を吾儕も疾うら薄々を詰ゐ聞てゐまーさが今茲ゐ三月惣助どんと丁稚どんとを供ゐ連れ花見ゐ来たとて其返りゑお寄ゐ時ろ容子と見ていよ〳〵然と悟りましさ。ム、然言れば吾儕も彼時何ざう二人ゐ舉動が變ざと思つてゐたが旦那樣と如何年が違えばとく然いふ事を被成くは濟まい物をと田舍堅氣夫婦え語合つゝも案じ暮ーてゐたる節仁右衛門は不計樹間を見て掃除をーながら彼處までえ心も附でをりさりーが何やら消息やうお物がと言つゝ立く庭へ下立ち手ゐ拾ひ取り持歸りナニ仁右衛門樣惣助よりムゝ惣助とは今專をーさ本郷ろ手代れ惣助ろ事で有らうが何で吾儕ゐ家へ消息を放り込で行さのだと不審ながらも封押切讀下ーゐる文体は吾儕と道おらぬ義

とも存じながら不圖しさ意の迷ひよりお柳様と言交せしを連て遁くと被仰に附き昨夜諸共ふ本郷を走り此家へ差て来る途中木母寺前の堤の上ゐて計ずも振籍者ゐ出會吾儕ハ驚き轉び落ち氣絶を致してひしが後ようく意附き登つて見まば内室ゐハ無懸にも切殺され敢ない最期をお遂なされ身体ハ血ゐ塗れゐるゐ驚き悲む外ハなく是といふのも吾儕が道なら ぬ事致せしが基ゐて斯いふ御最期をお遂おさまし事おまば生てをりても言解立も依て隅田川へ身投く相果し上お詫致せば此事よろしく旦那様ゐお詫のゐど希がふと記しあるを ば讀本夫側ゐ聞ゐる妻も吃驚餘の事ゐ顔見合せ言葉も出ず茫然さり茲の家より塀越ゐ見ゆる 堤の其上を馳行一人の村乃者れ跡を追たる一人の男モシ〳〵急で何處へ行つしやる。イヤ何處ゐ何乃と言所でハおい木母寺前ゐ能女が殺さまてゐて大騒ぎ今御新へをしたるゆゑ追附御檢視も来であらう夫のらにては見られぬなれば今ゐ中ゐ行き能見るゐだと言ば一人も然いふ事なら仝士ゐ行ふと打連く南れ方へ馳行ゐ話し狀聞さる夫婦は度胸いよ〳〵夫と思ふ計ゐ消息と携へ足空さま堤を差て行に々る然ば又茲の村役人ハ人殺しの事聞よりも直ゐ此所の支配をる代官伊奈半左衛門ぬしへ新へ出るゐ檢視の役人出張し傷口なんどを更

めし上足の裏をばつく〳〵見く越ゐ泥の着る所を見まば定めし穿物ある成る可し夫調よと下知の下家隷ハ心得堤の上下探せば下駄ハ有らぎしく表にハ紅もて桔梗の紋を附け裏ゐハ墨もて山形ゐ與吉の二字を寄字ゐしさる鬼骨の竹輿提灯一張を得たるに偖ハ竹輿にて參りし物ゥと言をり仁右衛門夫婦の者側よりしゑ進出で吾儕共ハ當村に居る植木屋仁右衛門其妻お熊とやす者此狀さまし婦人ゐ附てハ少々意中もひえば何卒お見せ下されと願ふに檢視も何處の者と知よしなくて困りゐる所であまば之を許し左様であらば篤と見て設し見識人であるならば仔細を包ぎやし上よと

紙かゝを除て見せらるゝに二人ゝ膝を進めつゝよく〳〵見るに諾ゑ達えぞお柳が無慙に殺さるゝあたるみヤア内室で御坐りましさの。お嬢様で御坐りましたゝ。此情ないお姿ゝ。何事で御坐りますと空き骸を揺動し夫婦等く嘆々るに撿視の役人是に向ひ偖ゝ其方達の見知者らシテ此女ゝ何の者ぞと問れて仁右衛門泪を拭ひハイ是ゝ本郷二丁目の金貸營業嶋屋喜右衛門の女房お柳とやしゑ小網町二丁目の玄米問屋伊勢屋重助の嫁で御坐りますとやし上しゑ役人ゝ直両人と呼出ゑやり再度此方に打向ひ如何いふ譯で其方達ゝ是なる女と懇意ゑ致すぞ。ハイ外の譯でも御坐りませぬが茲ゑ扨ります女房お熊ゝ此お柳の乳母ゑ上り十四のをりまでお附添やしくをりてゆえば今の嶋屋へ御縁附となさきた後も度々音信往返致してをりまゝく今朝も今朝とゑ箇様〳〵夫婦諸をしくをは所ろ庭の木の間ゑ落さる一通拾ひ取ゑし其所へ提の上で人殺しがと話く通る人あるゑ何事おらんと来ゑ見れゝ思ひ掛なき此景況驚くの外ひえぞと一什を語て消息扨出すゑ撿視ゝ見やり事柄をゑな書留て終ゝ所へ早使を受け何事やらんと喜右衛門重助の両人ゝ取物も取敢ず来りて見るに此爲体ゑ今更驚き呆るゝ耳外に言葉ゑ出ざりゝ中にも嶋屋喜右衛門ゝ女房お柳と主管惣助飯焚熊五郎の三人とも昨夕突然行方知ず其上に未ざ七十兩の金さへ紛失してゐれゝ畢り意を悼ゐる節柄ゆゑゑ最どなゑ胸ゑ答ゆる此厄難撿視ゝ仁右衛門夫婦が事より消息の叉さへ委敷語り夫を喜右衛門ゑ見せゝれゝ首て知ゝ二個が不義又驚きと面目なきゑ首を低て黙然たり撿視ゝ重助と呼近附け喜右衛門とお柳とゝ夫婦なりとやゝつるが年の程さへ相應らぬ親子と言ても然る可き年齢なりと見らるゝが是ゝ定めゝ妻でゝなく妾にやりたる物なるゑと問ゑ此方ゝ包もせず仰の通り喜右衛門ゝ今茲五十三歳ゑ相成嫁柳ゝ十九歳一体喜右衛門の養女丹て目下藏前の井筒屋方に奉公致す一子文次郎の嫁に致す積と以て一昨年遣ゝ所ろ本人仝士能き中ゑ相成更めく女房に貰ひたき旨喜右衛門方よりやゝ參るゑ二人の不所存ゑゝ呆れゝえど其ま〻遣ゝはなりとやゝ上ゝゑ撿視ゝ書留人殺ゝ詮義の上追く呼出す事もあるべゝ死骸ゝ引取勝手次第ゑ葬る可ゝと言通與撿視ゝ役所へ重助ゝ小網町へと立歸る跡ゑ喜右衛門ゝお熊夫婦ゑ頼て死骸を引取歸り極内分に葬り果熊五郎が其夜より行方知ずに成さる事も深く包く言ざるゝ外聞惡きと惣助ゑ一つの恩があればなり（伊勢屋重助および仁右衛門夫婦の話此下ゑなゝ）然ど隠さるより顯れたるゝ無ゝとの古語包とすきど此事ゝ世間一般の噂と

成りて木原店の權次に聞附け大き丹鷲き嶋屋へ行き仔細を聞ば云々ゐく熊五郎さへ其夜より行衛知ぎに成たゐ由語るゑ發と度胸突き備ね渠奴めが二人の者を煽動ゐーて連出ー惡事と働き金状取ーの憎い奴めと言ばえゑ言で怒りの面地あれ善右衛門夫とも意附ぎ熊五郎ね二人ゑ者ゐ語えれつゝ欠落の手傳なーゝが白刃ゑ驚ぎ其所より道て家へも歸れず其儘姿状隠せーならんがお上へ上りー惣助が書置中ゑ熊五郎の事が毫もあらぬを僥倖此方も此度の事ゑ附くを面目なぎ事多ぎゆゑ只管穏便を思ひつゝ熊五郎が上を毫も言ぎ最早濟ーゑ終たれば其心ーく和主もまた人ゑを語り給ひそと密ぎ告るを此上もなぎ事なりと安心ー權次を我家へ歸りゆり不題代官伊奈半左衛門ぬーを我支配中ゑ事ありーが人殺の詮鑿を町奉行へ任をる方反つて果敢取捗明んと證據と成る可き提灯ゑ惣助の遺書添へ月番なをば南の奉行大岡越前守ぬーへお願ありーゐ大岡ぬーを心得て直ゐ一つの布達を作り鬼骨の竹輿提灯紅ゑて拷問の紋を附け墨ゐく山形丹與の字と吉の字を寄字にーさる提燈を持へ或を張替たる覺えあゐ者又を新規拵へ或を張替を注文さをたる者を早々月番へ訴へ出よと江戸八千餘町の提燈屋へ殘らぎ達ーを出ーゝに幾程もおく淺草門部川町の提燈屋七兵衛と言る者一つの提燈を持參ゐー町役人附添く南の番所へ出たる丹大岡ぬーを近く呼入先其提燈を撿めて見るゑ徇出ーゝ品と全一ゑて然も新ーぎ物なりゆり